

第5章 戦争と生活

社会人として、家庭人として、学生として
戦時下で家族を支えていくことは大変困難なことであった
しかし、その反面、機転をきかし、ちょっとした工夫や
近所同士の助け合いで、辛い日々をのりこえた区民の記憶をたどる



昭和18(1943)年の家計簿(主婦の友社編)
(資料提供: 蜂巢成昭さん)

空襲と食糧難で、みんなクタクタでした

吉沢 久子さん

大正7(1918)年、東京都生まれ。生活評論家、エッセイスト。10代から事務員、速記者、秘書などの仕事に就く。終戦間際の昭和19(1944)年11月～昭和20(1945)年9月、評論家の古谷綱武氏に応召中の留守を頼まれて東田町(現・成田東)に移り住み、戦時下の生活を日記に記す。戦後、古谷氏と結婚し、執筆活動、テレビ・ラジオ出演等で活躍。近著に『吉沢久子、27歳の空襲日記』(平成27(2015)年6月、文春文庫)、『97歳。いつからでも人生は考え方で変わります』(平成27(2015)年7月、海竜社)等、多数。
 ※古谷綱武…明治41(1908)年～昭和59(1984)年。文芸評論家。哲学者の谷川徹三に師事。作家の大岡昇平、詩人の中原中也らと活動。戦中・戦後は女性論、児童文学評論等で活躍。

■ 27歳の空襲日記

私は深川の生まれで、戦前から働いていました。戦局が激しくなるまではフリーの速記者でしたが「勤務先の無い女性は軍需工場で働けと言われる」という噂を聞いて、神田須田町にある鉄道教科書会社に入社しました。そんな折、仕事の助手を務めていた評論家の古谷綱武が応召されることになり、戦地に行っている間の自宅の留守と戦時下の生活記録の執筆を依頼されたため、阿佐谷にあった古谷の家に移り住みました。ちょうど、空襲が激しくなる直前の昭和19(1944)年秋のことです。それから終戦直後の昭和20(1945)年9月まで、阿佐谷から神田の会社まで通勤しながら、日々の暮らしぶりや空襲下の心境を克明に日記に記しました。当時、私は27歳。その少し前に、結婚を約束していた男性が応召先で戦病死し、連日の空襲に「死ぬかもしれない」と怯えながら必死に働いて生きていました。

今でも、戦争のことは思い出すのも嫌です。しかし10数年前、書棚の整理をしていて、偶然、当時の日記原本を見つけて以来、「戦時の生活実態を、若い世代に伝える必要があるのでは」と考えるようになりました。そんな中、編集者の熱心な勧めもあって『吉沢久子、27歳の空襲日記』を出版しました。



吉沢さんが戦時中に書いた日記の原本

■ 鉄かぶとを背負って通勤

私が阿佐谷に住み始めた頃は、近所に田んぼが広がっていましたが、そんなのどかな町にも、空襲(参照▶P18)は容赦なく襲ってきました。日記を読むと、書き始めてからわずか1週間で、3度の夜間空襲に見舞われたことがわかります。当時の女性は綿入れの防空頭巾(参照▶P17)にモンペ姿が定番でしたが、その頃になると空襲に備えて鉄かぶとを持つ人が増えてきました。私も、阿佐谷から神田まで、防空頭巾の代わりに鉄かぶとを背負って通勤していました。

やがて空襲が日常化し、女性たちの中にも次第に「ついに東京も戦場になったのだ」という意識が生まれてきました。それまでは戦時下とはいえ、若い女性たちはモンペ姿(参照▶P17)に髪飾りをつけたり、下駄の鼻緒に赤い布を使ったりと、ささやかなお洒落を楽しんでいましたが、その鼻緒に使う布



通勤中に拾った米軍が撒いたピラ

さえ不足し、それどころではなくなりました。

一日に何度も警報が鳴り、「あ、今日も生きていた」という毎日。昭和19(1944)年12月3日の日記には、空襲警報下で近くに爆弾が落ちる音を聞きつつ、日向ぼっこしながら縫い物をしている様子が書かれています。爆撃にさらされるうちに、だんだん恐怖の感覚がマヒしていく自分がいました。きっと、平常心を保つための防御反応なのだと思います。夜間空襲の最中でも、防空壕(参照▶P20)で鉄かぶとを被り『源氏物語』を読

んでいました。敵機のB29(参照▶P20)が落ちるのを見ながら、「あの人たちだって人間。戦争って嫌だな」と強く感じたことを覚えています。

■ 阿佐谷の建物疎開

昭和20(1945)年3月10日の大空襲で東京の下町は焼きつくされ、勤務先があった神田須田町の辺りは、罹災者であふれていました。この頃になると町内に住む既婚女性は次々と地方に疎開していき、残された若い私が隣組(参照▶P18)の役割を担っていました。東京大空襲の翌日、隣組長が集められ「杉並区全体で、6万人の罹災者を受け入れて各戸に宿泊させる」との通達を受けました。結局、私たちの町会では受け入れが中止されたのですが、それが分かる直前まで、焼き出された人を迎える準備に奔走しました。

3月下旬には阿佐谷通りの建物強制疎開(参照▶P18)が決まり、町はにわかに慌ただしくなります。疎開の決まった通り沿いのお店が店先で商品や道具類を並べて売り始め、まるで古道具市の様相でした。疎開作業には、私も隣組の要員として参加し、一緒に建物を曳き倒しました。当日は壊された建物の柱で作った薪(まき)や、お店のアイスキャンディーの棒まで持ち帰り、自宅の風呂や煮炊きの燃料にしました。暮らしに男手がなくなる中、力仕事や便所の汲み取りまで、残された女性たちの仕事になりました。

■ 臭い干魚、お茶がらの佃煮

日々の暮らしで空襲以上に過酷だったのが、食糧難でした。昭和19(1944)年暮れの日記を見ると、会社の送別会のごちそうとして、乏しい材料で「肉無し八宝菜、サツマイモをつぶして、ちょっと飾りをつけたケーキ」など、苦心の料理を作っています。米不足の中、サツマイモばかり入った塩味の芋がゆで空腹をしのぎました。さらに翌年になると配給は激減し、「一人3日分の野菜の配給」が長さ5センチメートル程度に切った大

根だけということも。腐ったようなアンモニア臭のするスケソウダラの小さな切り身を、貴重なタンパク源として大事に食べる生活でした。大金を出せば、闇の流通業者から何でも買えるとはいえ、その値段は法外で、とても手が出ない。例えば、当時、私の給与は月120円でしたが、昭和20(1945)年3月に闇で買った砂糖の値段は、1貫目(約3.75キログラム)当たり400円でした。

まともな食べ物がなくなり、お茶の出しがらを干して作った佃煮をおかずにし、ヒヨコグサ、ハコベなど庭の野草を刻んで汁の実にしました。今でも、春になると当時をしのいで庭のハルジオンを摘み、お浸しにして食べたりしますよ。

■ 戦争は、平凡な生活の幸福を奪う

終戦の玉音放送(参照▶P20)は、神田駅近くの電気屋さん前で聞きました。なぜだか分からなかったが、見知らぬ人たちに混じって聞きたかったのです。敗けたと知り涙を流しつつも「ほっとした」というのが実感でした。放送を聞き終えた周りの人々も、心なしか明るい顔をしていた気がします。みんな長い戦時生活にクタクタになっていて、勝つか敗けるかよりも「終わって良かった」というのが、正直な気持ちだったのではないのでしょうか。

昭和20(1945)年8月19日の日記には、「風呂焚きをしながら歌をうたっていた自分に気付き(中略)、空襲がないとは、何と嬉しいことかと思った。」と、書かれています。とにかく、これで毎晩の不眠や食料不足がなくなるという解放感でいっぱいでした。戦争は、平凡な日常生活の幸福を容赦なく奪います。あの時代を経験した者として、どんな事情があっても戦争は嫌です。

参考文献:

『あの頃のこと 吉沢久子、27歳。戦時下の日記』 吉沢久子 著

『吉沢久子、27歳の空襲日記』 吉沢久子 著

※本文中の日記箇所は、同著から引用した。

(平成27年9月 取材:内藤じゅん)



緊張の中でも出合いを楽しんだ 戦時下の青春

出澤 粧子さん

昭和2(1927)年11月、四谷で生まれる。小学校を卒業後、東京家政学院高等女学校に入学。

昭和19(1944)年、戦況が激しくなると近所の陸軍省参謀本部も危ないと、阿佐谷へ移る。

1年間ほど学徒動員で中島飛行機の工場へ通う。現在、88歳。

真珠湾奇襲攻撃に始まった開戦のニュースを昭和16(1941)年12月8日の朝のラジオで知った。

会う人々の興奮した眠つきを感じながら、私は何時ものように師走に入った冷たい風の中を女学校へと向かった。

教室に入ったらストーブに石炭を入れながら話は今朝のニュースで持ち切り。小学4年生の時に日中戦争が始まり、世の中はだんだんと戦時色に濃く包まれてきていたが、人々はずいぶん「やった」という思いでうきうきとしていた。

朝礼がすむと皆で靖国神社に戦勝祈願に行った。入学した頃は、アメリカ人である英会話の先生は何時の間にか姿を消してしまわれていた。入学時にかたい表紙の英語の教科書に未来と希望を抱いていた私達の回りから一切英語は排除され、防空演習や勤労奉仕の時間がふえた。まだこの頃は10日間か2週間位の短期間奉仕を時々行った。乾電池工場、煙草の専売局、造幣局等ずいぶんと色々なところに行った。

戦闘帽を手作りして分列行進の練習をしたり、樫の木の棒を振り回した体操をしたり、学問より女でも戦うことに役立つ方向へと突き進んで行った。家に帰って学校でのことを全部話すると父は苦い顔をして黙っていた。その時父はこの戦争は…と行く末を考えていたのかも知れない。

■ 中島飛行機の工場へ

そのうち学校へは行かず、中島飛行機の工場へ毎日行くようになったのだ。

私は「行って来ます」と元気よく家を出た。中央線を三鷹で降り、そこから広々とした麦畑の中の道をポコポコと歩いていく。風が吹けば土埃を上げる。何分位歩いたか今では覚えていない。

「ねえ、ちょっと前を歩いていく男の人、Aさんではないかしら」「うんそうかも知れない、ステキね」前を歩いて行く人というのは和菓子職人で、徴用で工場に来ていて仕事を教えてくれた人なのだ。砂糖もなく和菓子なんて出来っこない。色々な職業の人が工場に来ている。

そんな他愛もない会話を交わしながら麦畑の道を歩いた。私は女三姉妹で学校も女子校であったので男性に対して免疫が出来ていないので、男性を見るとフツフツと炎えるものがあったのだ。可愛らしい恋なのだ。

工員さんと同じ三部制で、朝の8時から4時まで、4時から夜中の12時まで、12時から翌朝の8時までの24時間勤務。私のついた部署はピストン製作だった。

ピストンの溝を切る仕事はそんなにむつかしくはないが、なれないので早くは出来ない。自分の手がおそいとベルトコンベアーの上にのせてとどめておくと、それが山のように積み上げられてしまう。

「神風」と書かれた手拭いの鉢巻をして、黄土色の作業服、15、6歳の一番おしゃれをしたい時に油くさいヨレヨレのナツパ服(註)。でも皆勝つまではと不平ひとつ言わずにがんばっていた(勝つことを信じて)。

夜中の12時からの時は夕方から寮に行き、仮眠をとって皆で工場に向かった。

電気は煌々(こうこう)とつき、ジュラルミンの金属が反射する光はまばゆいばかりで工場全体が輝いていた。その雰囲気興奮して「よしやるぞ」と闘志をたぎらせた。

■ 防空壕まで走って走って

硫黄島や沖縄が玉砕してからはアメリカの飛行機がどんどん飛んで来て空襲(参照▶P18)の憂き目にさらされた。

警戒警報のサイレンは鳴りっぱなし、そして間をおかず空襲警報(参照▶P20)のサイレンが途切れ途切れに不気味に鳴った。私達はただちに工場から少し離れたところにある横穴式の防空壕(参照▶P20)まで走って走って行き着く。

ある時は工場の食堂で食事中に突然の空襲警報。もう敵機(B29(参照▶P20))は私達の上空まで来ていた。一刻を争うときだというのに、私達は手を汁でぬらしてご飯をにぎり始めた。そして外に出た途端にバリバリという音と共に急に低空飛

行となって機銃掃射をやりだした。パラパラと銃弾が飛んだ。私達は日頃教えてもらっている通り、目と鼻を手でおさえて地面に伏したが生きた心地はなかった。敵機も恐れから長くはない。さんざんあばれて去って行った。

ある時は、空襲警報解除のサイレンが鳴って、もぐらのように壕から這い出してほっとして空を見上げると、秋の夕陽が落ちようとして西の空を真っ赤に染めていた。その夕陽の美しかったこと、空の茜色が美しかったこと、生きていたのだという実感がひしひしと湧いて来た。今でも11月の茜空を見るとまざまざと思い出す。

またある時は、夜中に家に帰ることになり、灯火管制(参照▶P20)下で少しの明かりも洩らさない真の闇の夜道を、迎えてくれた父と歩いていると東の空が真っ赤になっていた。「なんでも東京方面が焼けているらしい」と父は一言言ったきり2人とも黙って歩いた。それが昭和20(1945)年3月10日の下町の空襲だったのだ。翌日工場に行くときAさんは夜勤で工場にいたから助かったけど、ご家族全部焼死したことが報じられた。むごい、なんてことだ、と私達は泣いた。でもめめしくはできない、すぐに涙を拭いてけなげにも立ち上がった。

またある時は、空爆のため、中央線が不通になった。私達は阿佐谷方面に帰る人を探して2、3人の友達と一緒に歩き出した。線路沿いに、または家々の路地を。どの位の時間をどう歩いたのか今では忘れてしまったが、やっとの思いで家までたどりついた。

家族は、まず私に足があるかをたしかめたらしい。中島飛行機の工場のある三鷹方面は全滅らしいとの報があり、私はもう死んでしまったと思っていたようだ。しかし一縷(いちる)の望みを抱いて神仏に祈っていたところだったのだ。驚いたり喜んだり、ひとしきりは大変だったのだ。真暗い中に仏壇に供えたローソクの灯が不安定にゆれていた。

■ 参謀本部へ勤務

それからは、中島飛行機の工場はいよいよ危なくなって来た。私は、毎日親の止めるのもきかずに出勤して、今日こそは空襲で死ぬんだと自分に言い聞かせながら通った。その時は死をなんとも思っていなかったからこわい。3月の大空襲のあと間もなく卒業となったが、校舎も卒業証書も焼けてしまった。

卒業後は参謀本部に務めることになった。

私は速成にタイプを習わされて、戦地から来る秘密の情報を暗号班が解読して私達タイピストのところに回ってくる。そんな切迫した時期だったが、私達は軍人の誰がステキだの何だのと言って恋心を燃やしたものだ。

しかし参謀本部も危ないという父の勸で、7月末で退部を申し出た。拒否されるかと思ったが「どうぞ」と言う感じでやめた。私は不思議に思えた。しかしそれから2週間後の8月15日に終戦となった。

その頃の軍人達はすでにこの戦争の終末を予想していたに違いない。あの陛下の玉音放送(参照▶P20)と共に灯火管制は解かれ、世の中が明るくなった。飛行機の音にもおびえなくなった。

あれから70年近く日本には平和がつづく。戦争という言葉さえ遠い言葉になってしまった。しかし軍隊の使っていたヒ素が土中から出てきたり、不発弾があったり、原爆の後遺症で苦しむ人がいたり、まだまだ戦後はつづいている。

子どもや孫達の時代が心配。いつになったら平和な世界になるのだろう。

戦争は絶対にあってはならない

犠牲者に合掌

註 ナツパ服:青色の労働者服



東京競馬場厩舎前で聞いた玉音放送 「後方支援」と「兵站(へいたん)」

平岩 寧さん

昭和5(1930)年高円寺生まれ。

小学校4年生(当時尋常小学校)の時に西荻窪に転入し桃井第三国民学校、海城中学生時代に戦争を体験。現在も企業の役員として現役生活を送る。

■ 信じられなかった敗戦の報せ

昭和20(1945)年8月15日私は15歳、旧制中学3年生、勤労動員先の府中競馬場の厩舎に置かれたラジオの前に整列して、真夏の暑い日照りのもとであまりよく聞こえないラジオから流れて来た昭和天皇の放送を聞きました。その数日前に、父親が新聞社に勤めていた学友から日本は戦争に負けた、負けると聞いてそんな馬鹿など、半信半疑でしたが「詔書(しよしょ)」(▶参照:P20)の内容から、どうも本当に負けたのだと思いましたが素直には納得できませんでした。毎日のように勝った、勝った、の放送ばかりでしたから。この日から一週間ほどは夜になると灯火管制(参照▶P20)のための電灯の覆いはずす、はずさないで母ともめた記憶があります。

私は昭和15(1940)年の9月に大阪の都島から桃井第三尋常小学校(以下桃三小)に転校して以来ずっと西荻窪に住んでいます。その頃は物資は少なくなっていました、まだ配給(参照▶P19)には至っていなかったと記憶しています。翌年、昭和16(1941)年12月の真珠湾攻撃から太平洋戦争が始まり、急激に生活に変化が起きていたように記憶しています。桃三小でも学校前の空き地を開墾して、サツマイモを作ったりしました。校庭にプールのための穴を掘ったり、校舎の屋根には見張り所が造られました。

■ 終戦前の空襲で戦争のこわさを経験

昭和19(1944)年になると戦況は悪くなり、空襲が始まりました。その頃は久保の海城中学に通っていました。初めての空襲は、航空母艦から飛び立った飛行機が数機程度でしたが、暮れにはB29(参照▶P20)が編隊を組んで攻撃をするようになりました。目標はもっぱら軍事工場でした。私の従弟も愛知県の豊川海軍工廠(軍隊直属の軍需工場)で爆撃にあい、犠牲になり亡くなっています。

今のクイーンズ伊勢丹(杉並桃井店)の場所にあった中島飛行機の工場を狙った250キログラム爆弾がはずれ、桃三小



写真右上の校舎の屋根には敵機をいち早く発見するための櫓が設置されており、軍関係者や地域住民が交代で上空を見上げていたという
(写真撮影:稲神政喜さん/イナガミ写真館)
(写真提供:稲神壽志さん)

の周りにも落ちてきました。直撃でなくても、その落下音と衝撃は大変なもので、私の手製の防空壕(参照▶P20)はつぶれそうになりました。畑に落ちた爆発の跡は、25メートルプール位の穴があきます。西荻窪の北側の東京ガスのあった付近に落ちた爆弾で、10名くらいの方が亡くなっています。桃三小の近くに住んでいた私のクラスメイトT君の家に落ちた爆弾で防空壕に避難していた彼の母親と妹が亡くなりました。

中学生になると軍事訓練が始まります。配属将校と言って、現役の将校が訓練に当たりました。1年生では木銃、2年生になると本物の三八式歩兵銃、3年生になると実弾射撃の訓練がありました。あの頃は旧制中学校(今の中学校)には教練用として軍隊で使っていた小銃・騎兵銃、それに若干の軽機関銃と重機関銃、銃器庫があり、武器の手入れを交代でしていました。

■ 勤労働員

昭和18(1943)年頃には多くの男性は徴兵され人手が無くなって、中学生は勤労働員といって、男子は軍事工場へ行って兵器などをつくり、女子は縫製工場へ行って、落下傘や軍服の